

TADJ vol.6

まちを学びたくて
マチにまわってきた。



芸文の現役在学生と社会で活躍している卒業生が交わした、マチで学んだ話。

クリエイ党

職人さんに一番近い場所

高岡の魅力の1つとして、ものづくりの職人がたくさんいることが挙げられる。芸文生が最も職人さんに関わるのがこのクリエイ党。芸文生のアイデアと職人さんの技術で作品を作り上げ、毎年行われる高岡クラフトコンペへの入賞を目標に活動している。

学内で1番職人さんと交流が深い場所にいることでどんなことができるのか。またクリエイ党代表を務めたお二人がどんなことを思っているのかお聞きしました。



小野 志織 おの しおり

武田 伶 たけだ だい

秋田県潟上市出身

デザイン工芸コース在学

美術系の高校で書道やポスターデザイン、木工を学ぶ。大学入学後、木材をベースに、真鍮、鉄、ガラスなどの異素材を組み合わせたクラフトに興味を持つ。現在住んでいるシェアハウスのアトリエを改造計画中。

富山県富山市出身

文化マネジメントコース卒業

高校時代をフランスで過ごし、富山大学芸術文化学部にて2期生として文化マネジメントコースに入学。卒業後はCEMENT PRODUCE DESIGNにてデザイン業務を担当している。

てしま
芸文生・手島が
聞きました！



クリエイ党での活動のきっかけ

—— 武田さん、まずクリエイ党を立ち上げた時のお話を聞かせてください。

武田 そうですね。元々大学には学生と高岡の職人さんたちと一緒にものづくりを出来ないかというプロジェクトはあったんですけど、自分がトップとなってそれをサークル化したのが始まりです。「クリエイ党」という名前も僕ら初代で決めたんですよ。

—— それは高岡の地場産業を盛り上げるために？

武田 もちろんそれもありましたが、実際僕らが学生である間に作品が仕上がることは少ないなと感じたんですよ。それ

もあって、若い職人さんたちと

力を合わせることでアイデアを形にする体制を作りました



かつたというのがあります。職人さんたちと一緒にものづくりをする事は、文化マネジメントコース（2015年4月から「芸術文化キュレーションコース」に改名）の僕にとっては、すごく意味があることだったと思います。

小野 私が入学した頃は、既にクリエイ党が活動していました。もともと高校の時からもっと人と繋がれるような手になりたいなと思っていましたよ。そんな時、地域の職人さんたちと実際に

関わる場であるクリエイ党が富山大学にある事を知って、入学したいなと思ったんです。

—— 元々クリエイ党に入ろうと思って、入学されたんですね。

小野 最初は、もののデザインを実際に考えることがたくて参加しました。そうして活動を続けてきたのですが、

代表を任せられてからは、少

しずつ組織の運営についても

考えるようになったんですよ

ね。具体的に

は、クリエイ党が五年十年継続してものづくりをしていけるような仕組みづくりを構築出来ないかと考えてました。とは言いつつ、球技大会もやったり…。



←職人さんを出迎えるのクリエイ党会議。

組織と目標

武田 球技大会？そんなの全然なかった（笑）。でも、職人さんにアドバイスを聞きに行ったり、工場に遊びに行ったり、一緒に飲みに行ったりはしたかな。会議の後ほだいたいラーメン屋に行って延長会議とか。会議後の方がちゃんとした話をしてたり（笑）。今でもLINEグループでお喋りしたりね。

—— 活動をしていくに当たっての目標などはあったのですか？

武田 やっぱリサークルとして動き出した最初のメンバーだったので、高岡クラフトコンペ（※1）の結果

にはこだわっていました。お金も時間もかかっている訳だし。結果

として、僕らの代は非常にメンバーにも恵まれたこともあり、そのお

かげもあって幾つかの作品が入選や入賞をしまし

た。男子が僕一人だったので大変なこともありました

けどね！

小野 私たちの世代の頃にはだんだんクリエイ党の知名度も上がってき

ている事もあって、地域の職人以外の人とも関わる機会が多くなりましたね。様々

なコミュニティも意識し始めました。富山県のPR事業でAKB踊ったり…。

武田 なんだか面白いことになってるんだね、クリエイ党。というか、そもそもクリエイ党がまた活動していた事に驚き…。

成長できたこと

—— クリエイ党での活動を通して、成長できた事はありますか？

武田 がつりものづくりをするのは初めてだったので、文化マネジメントコースの学生としては良い経験になったかな。あと、いわゆる都市部の美大生と比べた際、受ける情報や刺激はどうしても劣ると思うんです。そういう人達と将来戦うとなると自分たちにはかない武器が必要になります。高岡という職人さんが身近にいる環境で、一緒にものづくりに励めることは、ここだけの強みだと思います。それだけでなく、僕の場合はプロジェクトのリーダーとして、メンバーをコントロールする力も鍛えられたと思う。

小野 私は、「みんながどう思ってそれを作ったのかな」と積極的に考えるようになりまして。それから、高岡で工場を持っている木工の職人さんとのこ

ろへ「是非、勉強させてください。」という感じでお手伝いに行かせてもらっていたのも、今思えばクリエイ党のおかげかも。

武田 そういうのすごく良いね。僕もクリエイ党で出会った職人さんが東京に来たりするときはごはん食べにいたりするな。大学を出た今でもちゃんと繋がっているのは、ある意味すごい事かも。いつか仕事を依頼できるようにって恩を返したいなあ。



（※1）高岡クラフトコンペティションとは、伝統工芸の銅器・漆器やアルミ産業をはじめとする、ものづくりのまち高岡が、新しい産業工芸の動きを誘発する情報発信基地となるべく、「新しいクラフトをもとめて」をテーマに全国から作品を募集しているコンペのこと。

かなやまちらくいち 金屋町楽市

伝統的な町で学ぶ場所

金屋町楽市は、江戸時代以来の町並みと銅器工芸が盛んな高岡市金屋町全域を使って行う生活空間内展示のイベント。作家さんの作品を町屋に展示したり、着物を着て接客したりなど、芸文生が大きく関わることの出来るイベントのひとつです。

建築を専攻している学生は主に、会場の屋内外で使用する展示台を担当します。建築の学生がイベントに関わることで何を得たのか、お二人に語っていただきました。

金屋町楽市での活動

——今日は、お集まりいただきありがとうございます。早速ですが、造形建築科学コース（2015年4月から「建築デザインコース」に改名）を専攻していたお二人が金屋町楽市でどんなことに携わったのかを教えてください。

加藤 僕らが活動した年の金屋町楽市では、作品の展示台を新しく制作するミッションがありました。金屋町という伝統的な町並みを生かし、どういうデザインがその土地に馴染むのかを提案すること

ひろせ
芸文生・廣瀬が
聞きました！



加藤 雅大 かとう まさひろ

足立 拓巳 あだち たくみ

愛知県一宮市出身

造形建築科学コース在学

岐阜県の普通科高校卒。工学・環境・芸術系といった選択肢から制作環境が整った芸術系建築コースへの進学を決める。大学入学後、金屋町楽市を通じて展示・内装への興味を持ち始める。2015年4月から大手ディスプレイ会社へ就職予定。

京都府京都市出身

造形建築科学コース卒業

小さいころから体を動かすことが好きだったため、小中高は部活など運動に夢中に。大学入学後、意匠設計を中心に建築に関わる様々な分野を学ぶ。現在は、横浜市にてグラフィックデザインとイベントなどのコミュニティ作りの会社に勤務。

金屋町楽市で経験したこと

加藤 僕が4月から働く会社は、店舗設計や屋内の椅子・机を生産していて、私たちの設計図を元に、提携している工場が生産するんですが、これって金屋町楽市で経験したこととほとんど同じなんです。設計・発注・搬入などという一連の流れを経験した事が、就職後、絶対に活きてくると思います。造形建築科学コースのイメージは、建物の設計を行って実際に建てるという印象がとても強いのですが、金屋町楽市での経験を通して建物の内側のデザインなどに

に力を注ぎました。
足立 僕が参加していた年はずっと使っていた展示台があったので、台そのもののデザインを考える事はありませんでした。主に屋外展示のレイアウトと、このイベントに来たお客様が見やすく回りやすいサイン計画の企画に携わりました。僕たちの年の楽市は、まだ学生自身が主体性を持って関わるということに慣れていなかったもので、現在そうやってイベント作りに学生がどんどん参加していくという流れは面白いと思います。



←実行委員の方に見本を使って展示台をプレゼン！



←新しく制作した木材の展示台。

も興味が高まりました。

足立 建築を学ぶ学生は普段、模型を作ることが多いと思うのですが、なかなか実際に建てる段階までには至らないんですよ。工芸を学んでいる人はモノが作れるし、グラフィックデザインを学んでいる人は印刷物として成果物を出せる。一方、金屋町楽市というイベントでは実際の制作物が社会に出て反応を貰える中で金屋町の人達との関わり方も学べました。そういう部分で今の仕事に活きていると感じます。今、僕は地域のイベントを企画・運営する会社で働いているのですが、その地域で活躍している人達とどう関わっていくか、住んでいる人達とどうやってその場所を盛り上げていくのかということも学べる機会になりました。



←お茶席で実際に展示台が使われている様子。

芸文の建築デザインコースについて

足立 この学校は1コースの人数も少なく、同級生・先輩・後輩も含めて金屋町楽市を通して同じ方向を向くことができましたね。

加藤 大学生

は、一人で学んで制作するというイメージがあったのですが、実際は、プロジェクトを達成



する為に企画や運営を通して何かを作り上げるというような、大きく町に開けたことも学べる場だということは入学してみないと分からないことでした。社会に近いところで制作活動ができたのが驚きでした。金屋町の方だけでなく高岡市役所の方とも一緒に活動できたことはとても印象に残っています。

芸文で学んでよかったこと

足立 イベントが用意されていること、クラス少人数制ということで、先生がすごく近く感じられるということとは他の大学との大きな違いだと思いました。学びたいと思った道のプロフェッショナルが手の届く位置にいて、いつでも相談できるということは贅沢なことですね。合わせて、工芸都市にある芸術学部としての文化の醸成やそれに因るんだ金屋町楽市などのイベントに参加できることは、社会に出てからの大きな強みや経験を与えてくれたと思います。



加藤 他の大学の建築を学ぶところだと一学年に何百人いるという世界ですし、首都圏だと同じ町にいくつも大学があるので、大学ごとに地域性を出すのは難しいですね。そういう意味で、金屋町楽市のような町へ開いた学びの場という存在は大きかったです。ここは高岡という工芸の町にある芸大ということで関わりやすく、町と関わりつつ建築を学ぶ場所としてとても面白かったです。

げんぶん 芸文ギャラリー

芸文主が発表できる場所

芸文の授業の成果展や、作家さんの展覧会を行うギャラリーと、クラフト品を扱うショップが備わった芸文ギャラリー。高岡の文化や様々な人たちに囲まれて展覧会を企画したり、モノを販売したりするギャラリーでどんな関係が生まれるのか。2015年度から芸文ギャラリーの店長を勤める在学生の平野暉さんと、芸文ギャラリーキュレーターを担当されている卒業生の羽田純さんにお話をいただきました。

芸文ギャラリーの存在

——芸文生にとっての芸文ギャラリーとは、どんな存在ですか？

羽田 まず地方の学生って個展やグループ展をなかなかしないよね。自分の作品を見せる事にあまり関心がなくて、もったいないなと思う。そうすると、学生が自分の作品を発表したり売ったりするのって、学校祭以外に無い訳。だから、売れた売れなかったっていうのは、あくまで学校祭っていうお祭りでの基準ではない。お祭りのお客さんはあくまでノ

ひぐち
芸文生・樋口が
聞きました！



平野 暉 ひらの ひかる

羽田 純 はねだ じゅん

富山県黒部市出身

デザイン工芸コース在学

広い視野を持ってデザインを学んでいる。
芸文ギャラリーでのアルバイトをきっかけに外部との交流も積極的に行う。

大阪府枚方市出身

高岡短期大学産業造形学科卒業

グラフィックデザイナーとして富山県を拠点に活動。芸文ギャラリー創設時からキュレーションを担当している。

地方都市でのモノづくり

——高岡でギャラリーを運営するなかで、意識していることはありますか？

羽田 芸文ギャラリーでは、学生作品の展示だけではなくて地場産業や工芸・食文化をテーマにした企画展を沢山作ってきました。暮らしの中で少しずつ関心が薄れていく、その土地の大事な感覚を、真正面からではなくて少し違った角度から再度提案してみることで、とても身近

りやつきあいで買ってくれるような所もあるから、それがそのまま外で通用するとは限らない。一方、芸文ギャラリーはそこから一つ社会に近い所に作品をさらすことになる分、お客様から冷静に作品をジャッジ（判断）してもらえ。大学卒業後に制作を続けるため社会に出たとき、初めて世間の評価を受けて、最悪の場合1から方向性を考え直さなければいけないような状況に合わない為にも、学生の内から実験的に評価をすり合わせていけるという意味で、芸文ギャラリーや他のスペースで作品を発表することはとても大切なことなんだよ。

平野 自分は授業以外でどれだけアクティブに動けるかっていう所に大学の面白さがあると思うんです。芸文ギャラリーはそういう志を持つてる学生たちが、もっとアクティブに動くための後押しになっていると思う。まず、社会に対して自分の作品を出してみる。そこから勉強できるのが沢山ある。学内だけでは得られない刺激を受けられる場が近くにあるのは相当デカイと思う。



な存在として見直すことが出来るんです。そういうアプローチの仕方も、モノを作る上ではとても重要な感覚で、やってて自分たちも発見があつてすごい楽しい。

平野 富山の細工かまぼこ（※1）や、醤油や和菓子をテーマにした展示もあつたように、高岡に根付いてる食文化や、産業レベルでは根付いていなくてもこの土地独特の面白い風習を展覧会にするのは、芸文ギャラリーの大きな特徴のひとつです。



←かまぼこの展示。富山の鯛かまぼこがズラリ！

芸文ギャラリーだからこそ

——高岡で活動することへのこだわりはありますか？

平野 僕は富山県出身なんで、地元ラブなところは結構あります。

羽田 地元ラブって何にも代え難い信頼出来るものだよな。

平野 でもやっぱり高岡は人が良い気がする。それだけじゃなくて、この人は何をやってどんな人柄でついでにうのが、いい関係を築けていると思うな。高岡の職人さんと芸文ギャラリーつながりで飲みに行ったり、そういうコミュニティの中にいられる事がいいなあと自分から自分も富山に残りたいって思うし。



羽田 東京が全てとか、地方が素晴らしいということではなくて、こうやって今暮らしている町で地につけて考えることが楽しいね。

やりがいのあること

——芸文ギャラリーの企画運営をする上で良かったと思うのはどんな時ですか？

羽田・平野 提案したものに反応があつたり、売れた時が嬉しいね。

平野 実際売れる時は「自分たちの信じたものがうまく社会に溶けた・受け入れられた」っていうのを感じる。

羽田 あと芸文ギャラリーの運営で楽しいところは、富山のカルチャーシーンにしっかりと一石を投じている感覚があること。単に垂れ流す様な企画ではなくて、毎回何かしらの手応えを感じる事ができる。それって凄いやりがいいにつながるよ。



←文房具やクラフト品を販売しているショップスペース。

平野 それだけ大きくなった芸文ギャラリーを引き継ぐっていうのはプレッシャーもあるな・・・。

羽田 新店長、コレからも頑張つて（笑）！

（※1）富山の細工かまぼこ文化を紹介した展示。かまぼこ企業と芸文生が力を合わせて、新しいかまぼこ食品を生み出したり、かまぼこの歴史や特色をまとめて紹介し、かまぼこの魅力を改めて感じることが出来る。



TADJ 表1

TADJ 表1

TADJ 表1

TADJ 表1

TADJ 表1

TADJ 表1

TADJ 表1

金屋町楽市

金屋町楽市

金屋町楽市

金屋町楽市

金屋町楽市

金屋町楽市

THE WORLD FASCINATES ME

THE WORLD FASCINATES ME

THE WORLD FASCINATES ME

THE WORLD FASCINATES ME

THE WORLD FASCINATES ME

THE WORLD FASCINATES ME

THE WORLD FASCINATES ME

THE WORLD FASCINATES ME

THE WORLD FASCINATES ME

THE WORLD FASCINATES ME

THE WORLD FASCINATES ME

THE WORLD FASCINATES ME

金屋町楽市

金屋町楽市

金屋町楽市

金屋町楽市

芸文ギャラリー

芸文ギャラリー

芸文ギャラリー

芸文ギャラリー

金屋町

金屋町

金屋町

金屋町

高岡

高岡

高岡

高岡

TADJ VOL.6

モリ学ばたい
アチルとびだした。

TADJ VOL.5

金屋町楽市

工：タイと茶をきわの力

・黄竹の力